

## Bさんが他人の筆箱を遠慮なく開ける理由

私は児童指導員という仕事をしています。これは発達に課題があるお子さんの援助を行う仕事です。他の同僚も、児童発達支援管理責任者とか保育士とか肩書こそ違え、**全員子どものために働いています。**

そんな職員筆箱の中には当然、子どもの支援のためのものが入っており、その用途は**子どものために使われるために持ち込まれています.....**というか、そう考えています。

かばんや財布、ロッカーを開けることはありませんが、開きかけの筆箱からなら簡単にボールペンをとって使います。学習塾で働いていたときには、同僚のデスクを開けて探し物をすることもありました。

9

## 「職場」という公共性のある空間での私有物の意味づけ

### Aさんの場合

- 「公共」の場
- 「もうそれは仕方ない」
- 「他の人もそうかな」
- Aさんにとっての「公共の場（≡職場）」はお互いに「あきらめて受け入れる」空間

### Bさんの場合

- **子どものために働く職場**
- **子どものために持ち込まれているもの**
- **他の職員も同じ**
- Bさんにとっての「職場」は私的なものも「子どものために」供されるべき空間

- ① 「私有物への権利」が制約される場としての「職場」
- ② 同じ規範は他者にも共有されているとする理解
- ③ Aさん「仕方なく受け入れる規範」  
⇔ Bさん「積極的に守るべき規範」

10

## 「自閉=定型間の葛藤」を一種の文化現象として読める理由

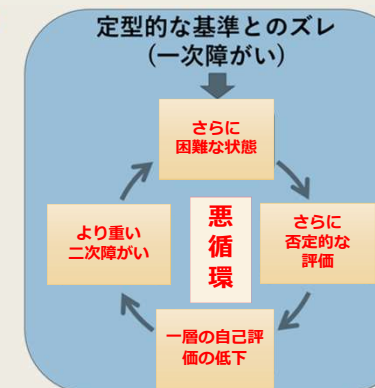
- AさんにとってもBさんにとっても、「私物」についての扱い方に安定した「基準」（当事者にとっての合理的な「理由」）がある
- それは①「対人関係」の中で形成され、かつ②「自他に共有されるべきものと」理解され、「逸脱」への**情動的な反応**を伴う点で「規範」と言える
- **文化的行為**は他者との間に共有された（または共有されるべき）ものとして安定的にその人に成立している観念（規範）によって**情動反応**と一体に成り立つ
- そのような行為が集団的な活動を生み、「文化集団」を実体化するものとなる
- ただし、AさんとBさんのそれぞれの「規範」は、どちらも孤立していて周囲の定型者と共有されにくい。
- そのため周囲と「文化」を共有することがむづかしく、さまざまな葛藤を生む点は「**異文化間葛藤**」や「**文化的少数者の不適応**」現象と同型。

※ 「文化差」が形成されたものである点と同じだが  
ただし発生の**基盤は定型が「後天的」**であり、  
自閉は「**先天的**」である点で性質の差がある

11

## 「自閉」の「特性」からくる「困難」を「文化的」葛藤として関係的に読み解くべき理由

- 「自閉」のひとつは、周囲からの「恣意的で不当な押し付け」に苦しみ、二次障がいに至ることが少なくない
- スレが強い規範的で**情動的な反応**としての「義憤」を呼ぶ
- そこから他者の関係の回避、あきらめによる従属、安定した自己の形成困難、怒りからの自傷・他害などが発生している
- それらの「原因」へのアプローチが十分なされないまま、「自閉の困った特性」として「矯正」の対象とされる支援が少なくない
- そこに悪循環が起こる



12

## 支援への二つの態度

不合理な他者 ↓ <b>「矯正対象としての自閉者」</b>	異なる「理由」を生きる異己 ↓ <b>「対話の相手としての自閉者」</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 「定型的規範」からの逸脱者</li> <li>■ 「逸脱(⇔違い)」を生むものとしての「特性からの問題行動」の理解</li> <li>■ 「定型的規範」への適応能力の育成と逸脱の矯正としての支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ お互いに「異なる規範」に生きる他者=異己</li> <li>■ お互いの規範のズレから生まれる「葛藤」としての「相互的な困難」の理解</li> <li>■ 相互の「理由」の双方向的対話的調整としての支援</li> </ul>

13

## 異己間の対話的支援に関連する実践例

- **発達障がい当事者研究**
  - ⇒ 「定型の言葉」で語れない、「当事者の言葉」の模索
  - ⇒ 自閉当事者としての主体性の模索
- **逆SST**
  - ⇒ 定型が自閉当事者の振る舞いの「理由」理解に挑戦
  - ⇒ 自閉当事者の主体性の在り方を定型者が学ぶ
- **当事者視点からの対話的支援**
  - ⇒ 当事者の悩みの共有を図るアプリ Focus on
  - ⇒ 異なる「理由」を生きるもの同士の「折り合い方」を探る



14

## ポイントのまとめ

- 「自閉=定型」の葛藤は「生き方のズレ」に基盤がある
- 「生き方」は意味に彩られ、他者との関係を方向付ける文化的規範を含む
- 規範的振舞いは対人関係調整の機能を持つ情動的反応に支えられる
- 少数派の「自閉」のふるまいは「定型的規範」からの逸脱と見られやすい
- その支援は「逸脱」への情動的反応に動機づけられた「矯正」になりやすい
- 「逸脱の矯正」の視点は「自閉」当事者の意味世界を見失いやすい
- 当事者の意味世界との対話を経ない「矯正」は結果的に支配的関係に陥る危険
- また対話的関係を経ない「寄り添い」は結果的に従属的關係に陥る危険
- それらを回避するには主体間の規範的意味世界間の調整的な支援が重要になる
- その点で異文化間葛藤と同型的

15

## 参考文献

- 高橋登・山本登志哉(編)(2016) 子どもとお金：お小遣いの文化発達心理学. 東京大学出版会
- 大内雅登・山本登志哉・渡辺忠温(2023) 自閉症を語りなおす：当事者・支援者・研究者の対話. 新曜社
- 山本登志哉(2013) 文化の本質的な曖昧さと実体性について－差の文化心理学の視点から文化を規定する. 質的心理学研究, No.12, 44-63.
- 山本登志哉(2015)文化とは何か,どこにあるのか対立と共生をめぐる心理学. 新曜社.
- Yamamoto, T.(2017) Cultural psychology of differences and EMS: A new theoretical framework for understanding and reconstructing culture. Integrative Psychology and Behavioral Science, 51, 345-358.
- 山本登志哉 (2023) 異質なもの同士の対話的關係調整を目指す授業実践の効果：異文化・障がい・冤罪を素材として, 駒澤社会学研究 (60), 57-90
- 山本登志哉・大内雅登・渡辺忠温.(2023)説明・解釈から調整・共生へ：対話的相互理解実践にむけた自閉症をめぐる現象学・当事者視点の理論的検討, 質的心理学研究, 22, 62-82
- 山本登志哉・大内雅登・渡辺忠温.(印刷中), 自閉的世界の形成過程に関する一試論：対話的ディスコミュニケーション分析の視点から, 駒澤社会学研究 (61)

16